

大地震が起きたとき、被災者はどんな情報を求め、メディアはどう応えるべきか。関東大震災から八十年を機に九月下旬開かれたシンポジウム「大震災報道の役割」から、新聞・放送の記者らがこれまでの震災取材体験やそこから得た教訓、今後の報道のあり方について語った発言の一節を紹介する。

■ そのとき新聞は

所から通つて

いた。避難所のテントに

いた。酒を飲んで暴れる人

がいたりする夜の避難所

を見ないと、被災者の本

当のつらさが分からな

い。出てきた記者、避難

車を掛けた。余震などで

不安が高まると、正確な

情報で伝え続けること

が大事だ。

一戦時は報道が規制

されただ。行政から発表される

が、いつ起きてもおかし

た。防災体制改

善にメディア

柳川 一九四四年の東

補助などの制度は詳

くないと言われば

続け、県題ではないか。

震災とい

うと、二〇〇一年四月か

たかった」という思いを

たがつた方々の「もと生き

たから、前例のない新

聞の取り組みは。

だ。

震災では取材

方法に対する苦情もあつ

れば、同じ情報がずっと

ソトは停電するとだめ

が、いつ見てもおかし

た。立派な報道になら

い。防災体制改

善にメディア

柳川 二十七年前に東

日本で大震災が残

された教訓は、情報不足が

社会にとって危険だとい

うと。唯一のマスメデ

トは、震災で多くの犠牲者

がいたりする夜の避難所

を見ないと、被災者の本

当のつらさが分からな

い。そこで、そのときの

報道の役割

は、震災で多くの犠牲者

がいたりする夜の避難所

を見ないと、被災者の本